

## 第三章 弥生時代

### 第一節 弥生時代概説

#### 一 水稻農耕社会の成立

縄文時代の晩期後半、北部九州の玄界灘沿岸に次々に降り立った渡来人があつた。彼らは在来の縄文人に比べ背が高く、水稻耕を行うための新しい技術と文化を携えていた。彼らもたらした新しい生活様式は、縄文人の生活に比べ、自然環境に左右されにくい米という食料を安定して収穫することができたため、周辺地域の人々にまたたく間に受け入れられていった。その後、この水稻耕作文化は西日本の海岸部や平野部に急速に広がり、更に関東・東北地方まで波及するのに長い歲月は要しなかつた。

#### 稲作の伝来と伝播

東アジアにおける農耕は、紀元前五〇〇〇年以上前に中国大陸の黄河流域の高原で、粟ホモ作農耕として始まつた。河北省磁山ジシェン遺跡では約三〇〇〇基の食料貯蔵穴が発見され、紀元前五四〇〇年から五二〇〇年ごろであることが分かつた。ほかにも黄河下流域の山東省北辛遺跡や、東

北地方の遼寧省新樂遺跡でも紀元前五〇〇〇年から四〇〇〇年の農耕に伴う遺物・遺構が発見されている。

一方、稲の原産地はアッサム・雲南省付近であるといわれているが、中国最古の水稲耕作文化は、長江下流の杭州湾に面した浙江省河姆渡遺跡で発見されている。この遺跡の第IV層からはコメとともに骨製の耜、木製の鍬などの水稲農耕具と木器製作用の石斧が出土している。この農耕文化はその後、北部の山東半島に広がり、朝鮮半島北部へはコマ形土器文化、南部へは無文土器文化の段階に伝わっている。最終的に、日本の北部九州の沿岸部に水稲耕作が伝播したのは、縄文時代晩期後半の時期である。なお、伝来のルートについては、これ以外にも山東半島から遼東半島経由で朝鮮半島に及んだとする説や、長江下流域から直接日本に伝来したとする説、南西諸島を経由したとする説などがある(第1図参照)。

北部九州の玄界灘沿岸に伝来した水稲農耕は、縄文時代晩期終末までに西日本一帯に広がる。鹿児島県下原・中ノ段遺跡、宮崎県学園都市遺跡、山口県延行遺跡、岡山県津島江道・沢田遺跡、愛媛県大湊遺跡、香川県林坊城遺跡、大阪府牟礼遺跡などがこの時期の遺跡である。その後、弥生時代前期の中ごろには関東地方から東北地方まで急速に拡大していった。青森県砂沢遺跡では、この段階の水田跡も発見されている。



第1図 稲作伝来の推定経路

(工藤善通氏原図)

コメの品種はインデイカとジャポニカに大別されるが、日本に伝来したのはジャポニカである。また、ジャポニカも温帯ジャポニカと熱帯ジャポニカとがあるが、古くは熱帯ジャポニカも栽培されていたらしい。

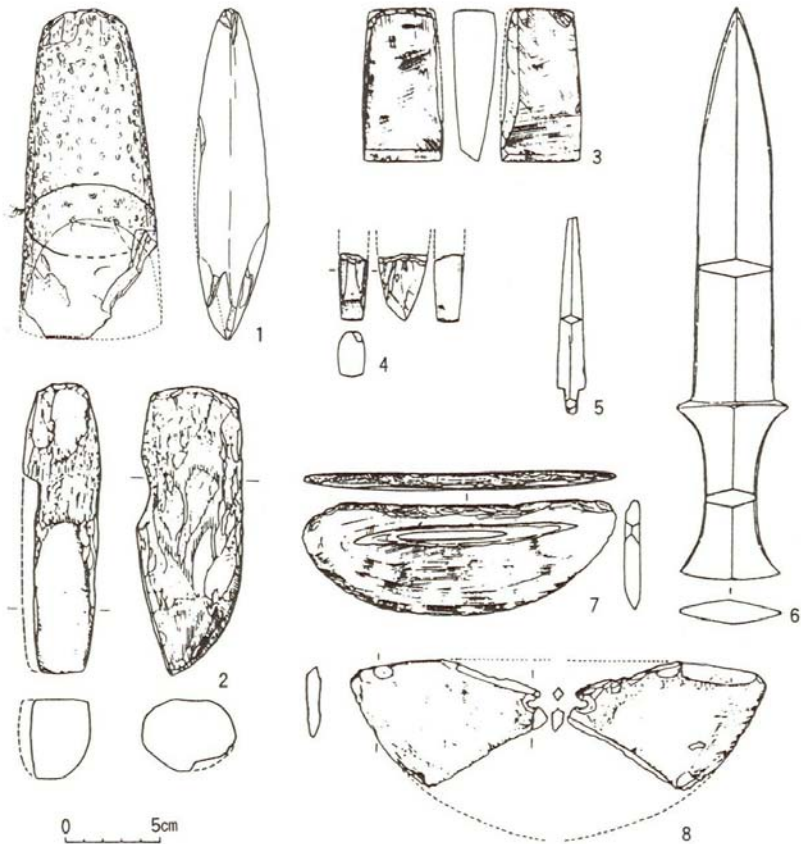
### 初期の水田

稲作の確実な証拠となる水田は、一九四七～五〇年（昭和二十二～二十五）の静岡県登呂遺跡の調査で発見された。しかし、この水田は弥生時代後期のものであった。その後、一九七八年（昭和五十三年）に福岡市板付遺跡で確認された水田は、縄文時代晩期末の突帯土器単純期のものであった。この水田の場合、畦畔は杭を打ち込み、横板を渡して補強し、水田の東側には幅約一トールの広い畦畔と大水路が掘られ、井堰によって水田へ灌漑されるようになってきている。このように板付遺跡の水田は水路・井堰・取排水口を備えた極めて完成度の高い水田であった。同時期の水田は、佐賀県唐津市菜畑遺跡・福岡市野多目遺跡でも発見されているが、同様に杭や矢板で保護した畦畔と灌漑施設を持つ完成されたものであった。

弥生時代の水田は九州から青森県に至るまで二〇〇か所以上発見されており、登呂遺跡では田一枚が二〇〇平方メートル以上のものもあるが、一般的には五〇平方メートル未満のものが大部分である。また、岡山市百間川（はらおじま）の原尾島遺跡では、検出された稲の株跡に規則性がみられたことから、直接田に種をまく直蒔きではなく、田植えを行う技術があったことが推定されている。

### 初期の農耕具

弥生時代の水稲耕作は、初期の水田にみられるように当初から完成した形で伝来している。使用された主な農耕具も太形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧・石庖丁などの大陸系磨製石器や木製農具など、新しい道具によって構成されている。これらの道具のうち、大陸系磨製石器は



第2図 弥生時代初期の大陸系磨製石器

- 1 太形蛤刃石斧（石崎曲り田遺跡） 2 挟入柱状片刃石斧（菜畑遺跡）  
 3 扁平片刃石斧（同） 4 柱状片刃石斧（同） 5 磨製石鏃（対馬加志々）  
 6 磨製石剣（中間市御館山） 7・8 石庖丁（菜畑遺跡）

朝鮮半島の遺跡から出土するものと類似し、特に抉入柱状片刃石斧・有柄式磨製石剣・柳葉形磨製石鏃や、擦切技法による孔を施す石庖丁などは日本と朝鮮半島南部にだけ分布するものである（第2図）。

土器についてみると、壺・甕・高坏・鉢の四種類に機能分化した土器が使用されるが、このうち甕・高坏・鉢は従来の縄文時代晩期の深鉢・浅鉢から変化したものである。しかし壺は新しく導入された器形である。

### 弥生人

日本の土壌はやや酸性であるため、石灰質の貝塚が形成された縄文時代と異なり、弥生文化を担った人々の骨の出土例は少ない。

弥生人骨は九州北部と山口県西部地域で比較的多く出土しているが、これらの地域の中でも二タイプの弥生人がみられる。福岡県・佐賀県・熊本県の平野部と山口県の西海岸に分布する北部九州タイプは、顔の高さが高く、鼻が低く、顔は全体的に扁平である。身長は男性で一六二―一六四センチメートル、女性で一五〇センチメートル程度と高い。長崎県・佐賀県・熊本県の海浜部の遺跡から出土する西北九州タイプは顔の高さが低く、幅が広く、鼻が高く、全体的に彫りが深い。身長は男性で一五八センチメートル、女性で一四八センチメートルとやや低い。両者のうち、西北九州タイプの弥生人は、縄文人の特徴を備えることからその子孫と考えられている。北部九州タイプの弥生人は、水稻農耕文化を携えて渡来してきた人々の子孫で、在地の縄文人との混血もあまり行われなかったとする人類学的見解もある。ただし、朝鮮半島での同時期の人骨は、慶尚南道三千浦市の勒島人骨があるが、まだ十分な資料や研究成果が得られていない。中国大陸でも同時期の人骨が極めて少なく、弥生人がどこから来たかについてはまだ答えが出ていない。